

---

# プラネタリウム ～懐かしい匂い、風の心～

平澤 生

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

プラネタリウム　く懐かしい匂い、風の心く

### 【Nコード】

N3934B

### 【作者名】

平澤　生

### 【あらすじ】

幼馴染とすごした懐かしい日々。先輩とすごす今という時間。ど  
つちが大切なんだろう

時間っていうものはいつもそ知らぬ顔をして流れていつてしまうもので、俺がもっと長い時間を過ごしたいと思っていた中学時代はあつという間に過ぎ去ってしまった。気がつけば真新しい制服を着て、電車に乗って学校に通っていた。中学校には毎朝、自転車で田舎 周りが田んぼばかり の道を通っていた俺にとって、電車に乗って登校するということは自分が高校生になったことを一番意識させた。

毎朝の電車は馬鹿みたいに混んでいる。何十両も連なつた箱の全てに隙間なく詰め込められた人間はどれをとつても同じ方向に行きたい人で、どれをとつても遅刻ぎりぎりの常に焦っている人だ。

だれもがせかせかとしている朝。初めはうんざりだった。もっと早く起きるよ。

二、三日連続で同じ車両のそれも同じ位置に乗ってきた揺れるたびに寄りかかってくる太ったサラリーマンと音漏れの激しい、Ｔシヤツを着た男に俺はそう言いたくなった。

しかし、心で言ってみた後に自分だって遅刻ぎりぎりの時間帯で来ていることに気がついた。

学校まで二時間。朝の五時起きは慣れるまでに相当の時間を要した。

そんなことがあつてから俺は電車がいくら混もうとなんとも思わなくなった。登校。出勤。帰宅。外出。いづれにしろ、この箱いっぱいに乗らざるを得ない理由が溢れているということに気づいたのだ。

そんなぎゅうぎゅうの電車に俺は今日もまた乗り込んだ。がたがた、と壊れそうに心配になるいつもの音をたてて、電車は出発した。また、なんでもない一日が幕を開ける。

溜め息は口の中で飲み込んでおいた。

俺の学校には俺とおんなじ中学校だった人は一人もない。中学を卒業したら大半はばらばらになってしまった。それぞれが卒業前に自分の目標を掲げて、必死に勉強をして高校に入っていた。そして納得いく進路に進めた人も納得いかずに終わってしまった人も、結局はそれぞれの道を進み始めた。

ふと、一人の顔が思い浮かんだ。

「わたしはね、えっと、この学校いきたいんだ…」

おんなじ塾に通っていたそいつはそうやって恥ずかしがりながら高校の案内を見せてくれた。触り心地のよい紙でできたそれは俺の中学から一番近い学校のものだった。

「いけんのか？」

「…頑張る」

「頑張れよ」

そんな会話をした半年後、そいつは見事にその学校に合格した。段々とそいつに関する記憶が新鮮になっていくにつれて、俺はあつことを思い出してメールをしようと携帯電話を取り出した。

「次に会つの週末の夜八時でいい？」

そう送信すると、さつき飲み込んだ溜め息が体内で消えた気がした。

2

時間というものはいつだって知らない顔をして流れていつてしまふもので、わたしがもつともつと思ひ出を作ったかった中学時代はあまりに早く終わってしまった。気がついたら買ってもらったばかり 当たり前前だけど の新しい制服を着て新しい学校に登校してい

た。変わってないのは自分の身長と、それから週に一回は幼馴染の古池葵に会うことだけだった。葵のほうが頭がいいから、わたしたちはおんなじ学校を受験しなかった。だから会えるのはその日だけだ。

高校にいつても定期的に会うと決めたのは、卒業式の日のことだった。涙もろいわたしはその日、完全に前が見えなくなるほどの涙のせいで殆んどみんなの顔を見た記憶が無かった。ただ、三学期の初めの頃から決めていたクラスの打ち上げに参加してずっとずっと泣いてたというのがその日の記憶の殆んどだった。

だけど、それよりもはつきりしている記憶がたった一つだけわたし頭の頭に未だに埃を被らずに残っている。

「お前さ、ちよつと泣きすぎじゃないの？」

その記憶の始まりは男の子の声の中では少し高い、葵の声だった。わたしはぐすん、と一度咽んでから顔を上げると葵の影が目に映る。最近またちよつと背が伸びたんじゃないかな、と思っていると影はわたしの隣に座った。

「だってさ、だってさ…みんなと今日でお別れなんだよ？葵とも今日で会えなくなるんだよ？寂しいじゃんか…」

わたしはめそめそと泣く子どものように、力なく言った。涙は拭いてもまた流れてくる。

「おいおい。別に、死んじゃうわけじゃないだろ…。家に行きや会えるっての」

葵は必死に問いかけたわたしにうるたえずに、笑って答えた。そして答えてから、何かに呆れたときのから乾いた笑い声を小さく上げた。

「もー。泣き止めよお。…たくしょうがねえやつだなあ」

それでも泣き止むことができなかったわたしに今度はめんどくさいときの声でそう漏らした。だけど、わたしはむしろそうやって葵が呆れたり飽きたりする度に泣けてきた。この声だって聞こえなくなっちゃうんだろ？と考えてた。

「じゃあさ、こうしようぜ？月に一回か二回くらいはお前ん家に行つてやるよ、な。それで、いい？……っておい、泣き止めって」

なぜだかわからないけれど、そう言われた瞬間に涙がぴたと止まった。わたしはごしごしと残りの涙を袖で拭って葵のほうを見た。

その日初めてのはつきりとした葵の顔だった。いつも通りの少し間の抜けた葵がわたしを見てた。

「うわ、お前目がすげえ赤い」

葵はじつと見つめてからそう言うて吹き出した。それからどんだけ泣いたんだよ、ってお腹を抱えた。

「わたしは葵より繊細にできてるんだよ！」

わたしは今度は顔を真っ赤にしてそう言った。

「わかったよ。ほら、目薬使え」

少し大きな声をだただけで退いたやけに素直な葵と、目薬を手渡してくれたやけに優しい葵のせいで涙がまたしても流れそうになつたけれど、何とか我慢してわたしは目薬を注した。

「うわ、また泣いてるよ！」

目を何度かぱちぱちさせると、瞳から流れ落ちた目薬を指して葵が嬉しそうに言った。

「これは目薬でしょ、バカ」

そう言ったわたしの目からは本当は涙がちよつと流れていた。

朝の登校中。ふと携帯電話を見ると、メールの着信をお知らせするランプがピカピカと忙しく青に点灯していた。

わたしはこの色が好きだ。綺麗だし、それを見るたびに誰からのメールだろうとわくわくするからだ。

メールはやっぱり葵からだった。こんな時間帯にメールを送ってくるのは葵くらいしかないから、なんとなくわかっていた。

「次に会うの週末の夜八時でいい？」

「了解ッ」

わたしはその後に顔文字をつけてそう返信した。

やっぱり、時の経つのは驚くほど早い。ちょっと休憩、と腰を下ろそうとした矢先にはもう週末を迎えていた。今夜の夜八時に俺は安田葉摘に会いに行く。

幼馴染の安田は、考えてみればいつだって俺の傍にいた。小学生のときお母さんに命ぜられた安田。そのときはまだはっちゃんと呼んでいた。は毎朝俺の家へやって来た。

「あーおーいー。遅刻しちゃうよー」

俺はたいていの朝をその声で起きていた。俺の両親は仕事が朝早くからあるため、起こしてくれる人が家にはいなかったのだ。目覚ましは機械的過ぎて少し鳴っていると耳に馴染んでしまう。そんなときの安田の馬鹿でかい大声は今思うと相当効いた。ぱちつと急に目が覚めて俺は反射的に着替えてランドセルを手にして階段を駆け下りる。そして朝ごはんはんに用意されているパンを手にとって、玄関へ向かう。

「遅いよお。もう遅刻しちゃうよ」

ぶーつと膨れている安田をよそ目に慌てて靴をはいて外へ飛び出す。安田は俺の母に渡されている俺の家の鍵で家に施錠をしてから俺をばたばたと追いかける。

学校までの道はそう長くない。俺は慌ててパンを食べて、安田と一緒に学校まで全力疾走した。

時が経つごとにどんどんその距離は短く感じるようになって、小学校も終わりに近づくと歩いてても遅刻しなくらいになっていた。身体が成長した証だ。いつの間にか俺は安田よりも身長が大きくな

っていた。

そうやって俺たちはいつでも成長を共にしていた。

だから、卒業式の日に泣いていた安田の気持ちは痛いほどにわかっていった。いつでも一緒にいたやつが、これからはいなくなってしまう。友達もそうだし、もちろん安田も。やっぱり本当のところ不安ばかりだった。ただ、安田が泣いている傍で自分が泣いたらどうなるかがなんとなくわかっていたのでぐっと堪えて強がった。強がって笑って何とかごまかしていた。

こいつの前では笑ってなきゃな。

それはもしかしたら頼れる兄が妹の前で涙を見せないのとおんなじ様な心理なのかもしれない。

もしものときの言い訳用に目薬を持っていた自分は今となっては少し笑えてくる。きつとそんな話をしたら、安田はまたあははは、と小さい口をいっぱいに開けて笑うだろう。それから最後にこう付け足す。

「葵、ありがとう」

たぶん、俺の目を一切見ないでぶっきらぼうに。そして俺も笑う。

学校や電車よりも幾分と居心地のいい空気はそうやって出来上がっていく。

今日もきつとそうだ。俺と安田は夜の闇にもそんな空気を作り出して笑いあう。なんでもない話。材料はそれだけだ。

時計を見てみると時刻は既に八時ちょうど。俺は慌てて服を着替えて安田に再びメールを打った。

「今から、行く」

それだけの文字を送り終わると俺は安田家へ向かった。



今夜は葵が家にくる約束になっていた。

「月に一、二回お前ん家に行つてやる」

そう言つた葵は一学期の半ばのこの頃は一週間に一回くらいのペースで会いに来てくれる。最初は二人とも、身長が伸びたとか、ちよつと痩せたとか言い合つてたけど最近はそんなことも言わなくなつた。

「うん。変わつてねえな」

代わりにそう小さく頷く。人間、一週間じゃそんなに変わらないものだな、と思つた。葵も大きくも小さくもなつてない、いつものままだった。

今日もきつとそう言つてから靴を脱ぐんだろう。わたしは玄関を見て、微笑んだ。

昔、葵はよくあそこで躓いてたっけな。

ふと昔の記憶が甦つてきた。

「葵君、大丈夫？」

玄関で大きな音がしたかと思うとお母さんの慌てた声が聞こえてきた。わたしはばたばたと玄関まで走る。するとそこにはぶつけた膝を優しく撫でるお母さんと葵がいた。表情からして結構強くぶつけたみたいだった。しかし、葵はわたしの顔を見るなり無理に笑つてみせて、全然平気だよ、とすくつと立ち上がった。よろけながらもわたしのところへくるから、わたしはそのまま怪我したほうの手を握つて居間のソファアームまで連れて行つてあげた。

「今、ジュース持つてきてあげるわね」

その当時、家には葵の為だけのパックのグレープジュースが置いてあつた。葵のお気に入り、家ではいつだってそれを飲んでいた。

ジュースを持ってきてもらった葵はもうすっかり足の痛みのことなんて忘れて笑つていた。

「ほら、早く行こう」

大きなコップ お父さんのと同じ大きさだ で一杯のジュースを飲

み干してからいつもそうやってわたしの手を引っ張って外に連れ出した。今思うと葵はすごく単純なやつだ。

「今から、行く」

葵からのメールが届くと、時刻は既に八時を回っていることに気がついた。わたしは慌てて今から自分の部屋に戻ってみる。机の上もベツドの上も女の子の部屋が疑ってしまう賑わいだった。

「…今日はリビングにしよう」

わたしはそう決めて一人で頷くと、玄関のチャイムが鳴った。

「あら、葵君。ハッなら今部屋にいったみたいよ」

お母さんの声がわたしの部屋まで聞こえてきた。葵はたぶん、それを聞いて階段を上ってきた。一歩ずつ、階段を上る音が聞こえてくる。わたしは慌てて部屋の外にでて、部屋のドアをばたんと閉めた。

「…あ、葵。今日はリビングで話そう」

わたしはまるで部屋でこっそりと誰かをかくまってるかのように慌てて、ドアから葵を遠ざけた。

「うん。オッケー」

幸い葵はくりりと回れ右をして階段を駆け下りた。わたしも後ろからそれについていく。

「あ、おばさん。これ、どうぞ」

先に居間に入った葵がお母さんに紙パックのグレープジュースを渡した。葵はいつまで経ってもあの味を忘れられないらしい。

「ねえ、葵。覚えてる？」

わたしはソファーにどかと座ってそんなことを聞いた。

「何を？」

葵は氷でひんやりと冷えているグレープジュースの入ったコップを一つ渡して聞き返した。わたしはさんきゅ、と小さく言ってから答える。

「よくさ、うちの玄関で扱けて、ここでジュース飲んだこと」

「…変わってねえな」

葵は家に入ったときに言えなかったからか、突然そんなことを言った。そして、黙りこくったわたしに続けた。

「お前、そうやって人の忘れたい過去をずばと……。変わってねえよ」

葵はそう文句を言つと、一気にジュースを飲み干した。

「よし、早く行こう」

そして葵はそんなことを言い出した。全く変わってないほうはまるつきり葵のほうだよ、と文句を心の中で言いながらも手を引かれて外にでた。

七月の夜は雲がなくて星がいくつも見えた。

5

安田と一緒に外にでたことに特に意味はなかった。ただ、なんとなくグレープジュースを飲んだら空の下に出たい気がした。

「俺さ、はつきり覚えてる」

俺は星を見上げてそう、呟くように言った。目には既に人工物は一つも映っていなく、まるで宇宙にいるみたいだった。

「あの星の名前？」

安田はたぶん、わざとそんなことを言つて楽しそうに笑った。

「違うって。よく玄関でこけたときのこと」

「ああそっちな。わたしさ、ずっと葵の手握つててあげたよね？」

安田が手を高く天頂にかざしてみせた。俺は久しぶりにちゃんと見る安田の手は小さい頃から変わってないことに気がついた。

安田は小さい頃から、俺が怪我をするとなんではよくわからなかったが怪我をしたほうの手をぎゅっと握ってくれた。それが玄関でこけて膝を打ったとしても何故か手を握っていた。だけど子ども

の頃はそれがなんとなく安心できて少し嬉しかった。

そういえば、一度だけ中学のときにも安田が手を握っていてくれたときがあった。中学のときに陸上部に入っていた俺は高飛びのミスで足に大きな怪我をしてしまったときがあった。そんなとき入院先に真つ先に来てくれたのが安田だった。安田は走ってきたらしく大きく肩で息をしながら俺の足を確認して、包帯が巻かれている左のほうの手をとってぎゅっと握ってくれた。走ってきたとはいえ、まだ一月下旬だったそのときの安田の手は驚くように冷たかったけど、その中にも暖かさが会った気がした。

「ごめんね。こうしてたら楽になるよね」

安田は退院までずっと学校のとき以外を俺の病室で過ごしてくれた。一生懸命な安田を見たら幼馴染ってやっぱりいいな、と思った。

「手が邪魔で星が見えない！」

俺はかざした手をどけて、またその遥か先に浮かんでいる星に目をやった。

「ちよつと！邪魔ってひどいなあっ」

そう、顔を膨らまして言う安田はやっぱり何も変わっていないかった。ただ、変わらないからこそとっても落ち着ける居心地の良い空気が漂っていた。

6

息がちよつと苦しくなるくらいに頭を上に向けて星を眺めていると、視界にはわたしの家も周りの家もそれから葵も見えなくなつて、まるで宇宙にいるようだった。

「ねえ、知ってる？あの星、アンタレスとか言うんだよ」

わたしは真っ赤に輝く星を指差して言った。中学のときに理科が好きだったわたしは星に詳しい。これだけは葵よりも得意だと言える。「ふうん。よくわかるな」

「簡単だよ。あの星はさ、さそりの心臓なんだ。それでね、その両隣が 星と 星のアル・ニヤトって星なんだ」

わたしは記憶の通りにそう言つと、葵が首をかしげた。

「…よくわからない。どれも同じに見えるけど？」

葵はつまらない顔をして言う。葵は自分の話はよく人に聞かせるくせに人の話を全然聞いてくれないのだ。わたしはなんとなく悔しくなつて更に続けた。

「それでさ、あつちのほうにもちよつと明るい星があるでしょ？あれはね、さそりの尻尾。シャウラって言うんだ。それで隣の星がレサート」

わたしが言い終わつて再び葵のほうを見ると、葵はいつの間にかちよつと離れた場所に立つていた。

「ねえ、わたしの話。聞いてた？」

葵は地面に落ちている小さな石を蹴っている。そしてそのままこっちを見ないで言った。

「お前、本当に星が好きだな。俺にはよくわかんねえけどさ」

葵は石を地面の端っこに勢いよく蹴り飛ばして、こつちを向いた。不意に目が合つてわたしはくすくすと笑った。

「何だよ、急に」

「何でもない」

わたしは目を逸らして返した。

「でもまあ、つまり俺はさそり座だからそのあんたらす？が俺の心臓でわけだろ？」

「…アンタレスだよ、バカ」

わたしはそうやって鹹かつてやった。葵は恥ずかしそうにポケットに手を入れて、いいじゃん、と口を尖らせた。

わたしはまた笑った。

星だつてくつきり見える田舎の夜はちよつと闇が多すぎるけれど隣に人がいるからか、それが葵だからか、ちつとも怖くなかった。わたしたちは家の近くをくだらない話をしながら散歩した。

7

「アンタラスとアンタロス。どっちが正しいんだっけ」

その疑問が浮かんだのは安田に会った二日後の電車の中だった。プラネタリウムの中吊り広告を見て思い出そうとしたが記憶は既にぶれていて、あのとときの安田が俺にバカと言ったことだけがはつきり残っていた。

「なあ、さそり座の心臓って何だっけ？」

俺は兎に角安田にそうメールしてまたプラネタリウムの広告に目をやった。

「七月七日、七夕特別天の川観測」

そのプラネタリウムの場所は家から意外と近い場所だった。これを安田に見せたら絶対に行きたがるだろうな、と思いながらも俺は駅に着いた電車から流されるようにホームに降りた。

駅から学校はそう遠くはない。徒歩で数分の道のり。安田はきつと寝坊でもして朝忙しいのだろう。メールの返事は来なかった。

「…どうしても気になる」

俺がそう言つて教室を出たのは休み時間のときだった。安田からの返事は未だになく、そのせいかずつとそのことが頭でぐるぐるしていた。

「あ、ちよつとどこ行くだよ」

友人はそう言って教室からひょこつと顔を出したが、俺が図書室と答えると顔を引っ込めた。

休み時間の図書室には学年のトップクラスの成績の人が入る特別進学クラスの人たちがたくさんいて、標準クラスの俺たちはあまり近づかないのだ。

案の定、俺が図書室に入ると聞こえてくるのは笑い声からペンで何かを書いてる音に変わった。俺は少し驚きながらも奥のパソコンが設置してある場所へ向かった。期末テストが近いせいか、空気はとてもつんつんとしている。俺は半ば忍び足でそろそろと歩いた。

「うわっ」

そう言ってしまったときには頭ですぐに後悔していた。俺は不意にこけてしまったのだ。一斉に視線は俺に向けられて俺は慌てて小さく頭を下げた。

「ふー」

やっとパソコンの前に来たときに全神経の集中が一気に途切れてその大きな音で息を漏らしてしまった。またしてもやってしまった、と思い慌てて口をふさいだ。俺とこの空間は雰囲気というか波長とというか全く合っていない。

早いところ調べてみよう。

俺はパソコンの電源を入れて、検索を開始した。

しかし、思っていた以上にさそりの心臓の情報がでない。俺は目を細めてでてきた一つひとつのサイトを見ていくが全く別の情報しか出なかった。パソコンは俺を笑っているかのように一刻も早くここから脱出したいと慌てる俺に関係のない情報を提示してくる。

そんなこんなで俺は数分間ずっとパソコンと格闘していた。

「ねえ、君さ。ちょっと静かにしたほうがいいよ」

後ろからそんな声が聞こえてきたときにはずっと動かししていなかった首が痛かったけれど、図書室内で始めて聞く自分以外の声に驚いて振り返ってみた。そこには赤いふちの眼鏡をかけた女生徒が立っていた。

「え、あ。…ごめんなさい」

その人は俺が言ってから、目が合うとにっと笑った。

「君、自分では気づいてなかったかもしれないけどパソコンの画面睨んでずつと唸ってたよ」

その人は微笑みながらそう言つと俺の隣に座ってきた。

「え？まじで…」

俺は慌てて周囲を見渡した。幸いみんな顔色一つ変えずに勉強に集中していたがなんとなく恥ずかしくなった。顔の温度が上がったのは、自分でも感じる。

「わ、ウケる。君、顔真つ赤じゃん」

初対面の人に笑われた変な心境に言葉が出なかった俺は小さく口を尖らせた。しかし、俺の目の前にいる彼女は何をそんなに調べてたのかな、と呟いて勝手にパソコンを覗いてきた。

「ん？これ何のことだ？」

マウスを動かしながら彼女は言った。俺とパソコンの画面の延長線に彼女の頭があつたので俺には何を見ているかがわからない。

「何って、さそり座のこと」

「ええ？これさ、『さそり』じゃなくて『さおり』になってるけど？」

笑うのを堪えながら彼女はそう言った。

「…ケアレスミスだよ」

「ケアレスミスか」

彼女に笑顔を向けられると不思議と怒る気になれなかった俺はそう言つて何とかやり過ごした。これが安田だったらどんなにバカにされるだろうか、と考えたら少し安心できた。

「ちなみにね、さそり座の心臓はアンタレスって言っただよ」

彼女は眼鏡を賢そうにくいっと上げてそう言った。俺は自分の考えていたものとどっちも違ったことに少々気落ちした。

「…今日の俺なんかだめだ…。さんきゅー」

俺はそう言つて席を立った。やっと出られるという開放感で自然と



足取りは軽くなった。

「あ、ちよつと…」

何故か彼女も一緒に図書室から出てきた。

「ね、君さ。名前は？」

図書室のドアの前でそう呼び止められた。振り返ってみると結構身長が高いことに気がつく。

「え？名前？」

「調べ物協力したんだし、教えてくれてもいいじゃない」

彼女はそう言っ腕を組んで歩み寄ってくる。

「まあ、いいけど。俺は一年C組の古池葵」

俺がそう答えると彼女は満足そうに笑ってからくりと後ろを向いた。

「おい、待てよ。そっちの名前は？」

あまりに突然に教室へ帰ってしまいそうになった彼女に俺はそう言った。別に意味はなかったけど、自分だけ聞かれたままなのがなんとなく嫌だった。

「あたしはね、森野日和。ちなみに二年A組。じゃあ、また合おうね」

森野先輩はそう言っ二年生の教室のあるほうへ走っていった。俺はただそれを見えなくなるまで眺めていた。

8

「それでさあ、聞いてよ！そのひより先輩に俺ずつとタメ口聞いてたんだよね」

葵の話にその人が出てきたのはわたしがさそり座の話をした次の週からだった。

日和先輩。頭はいいけれど特進クラスの生徒じゃなくて、身長は葵と同じくらいに高く、髪の毛はセミロングで、いつも赤いふちの伊達眼鏡をかけていて、わたしと同じくらいの日体好きで、一学年下の葵にタメ口を許していて、最近によく学校の食堂で葵に会う先輩。わたしはもううんざりするほどにひより先輩の話を聞かされた。葵は、自分の話はよく人に聞かせるくせに人の話を全然聞い

ただ、一目でわかるくらいに嬉しそうにその話をする葵は確実に恋をしているということがわかって、なんとなく楽しかった。

葵には中学のときに三ヶ月だけ、付き合っていた彼女がいた。わたしの友達の速川麻衣子という子だ。葵はあの時も半ば強引にわたしに麻衣子の話をしていた。

「それでさ、今日もノート見せてくれたんだ。俺、居眠りしてて……って聞いている？」

電話で数分話を聞かされた後に葵が聞いてきた。

「聞いてるってば」

「じゃあ、今何話してた？」

「麻衣子のがすがすごい好きなんだ。って言ってた」

わたしは言って、大きく笑った。本当はたしか、席が近いこととノートのことを話していたけど、確かにそう言っているようにも聞こえたような気がした。

「……まあ、要約するとそうなるか」

葵も自分自身で納得していた。

これがわたしの知る限り、葵の人生二度目の恋愛だった。ちなみに一度目　つまり初恋　の相手はわたしだ。といっても小学校の低学年か、幼稚園の頃にふざけておれたちはケツコンするんだよな、と言ってただけだけど。

とにかく、恋愛をしているときの葵はいつもよりもちよつと素直で面白いのだ。それにたくさん葵から日和先輩の話を聞いたから少

し会ってみたい気もある。

「大丈夫。天体好きに悪い子はいないよ」

わたしは葵の背中を軽く押すようにそう言った。

葵も満足そうに微笑んだ。

9

あの日以来、俺の学校生活は半分が授業、そして残り半分の殆んどが日和先輩によつて埋まっていた。日和先輩は部活に入らなかつた俺にとつての唯一の知っている先輩で、最近はよく食堂と一緒にお昼ご飯を食べる。

「ああ、そうだ。敬語やめてよ。葵君はあのとときの面白いもん」  
そう言ってくれたのもお昼ご飯を食べているときだった。そうやって言ってくれる度に俺は少しずつ日和先輩に心を開いていった。勉強で疲れてしょうがない学校で、友だちと笑っているよりも落ち着ける日和先輩。どこことなく不思議な力を持っている気がした。

まるで昔の安田みたいだ。遙か昔の記憶の、幼稚園の頃の安田だ。あのとき俺は口癖のように「はっちゃん」とケツコンするんだ、と言っていた。今思つてもそのときは本当に安田のことが好きだったのだと思う。実際に記憶の中の安田は、いつも俺に笑顔を見せてくれていた。俺はどんな時だつてそれを見たら明るくなれた。

「はっちゃん。どおしよ。先生の花瓶割っちゃった…」  
そう言つた時だつて安田は笑ってくれた。

「大丈夫だよ。ちゃんと言つたら許してくれると思うよ」  
案の定、先生は俺を叱りつけることなく許してくれた。きつと一人で黙つて花瓶の破片を隠していたら怒られていただろう。

そうやって安田も不思議な力を持っていた。当時の俺はそんな笑

顔の暖かな雰囲気の安田 はっちゃん とずっと一緒にいたかったのだろう。実際に今だって安田といるとやっぱり落ち着ける。今はそれが恋人や配偶者ではなく、兄妹としての雰囲気だけだ。

「こつちだよ」

昼の混雑する食堂できよろきよろと辺りを見回す俺に日和先輩が声をかけた。俺は人を掻き分けて声のするほうへ向かった。

「あれ、まだ食べてないの？」

先に席に座って待っていた日和先輩は読んでいた本をぱたんと閉じて、一度だけ頷いた。

「じゃあ、俺が取ってくるよ」

「さんきゅー」

日和先輩は食券を渡して微笑んだ。俺はそれを見たら長い行列が苦じやなくなる気がして、べた惚れかよ、と少し呆れた。

「おつそーい…」

やっとの思いで二人分の昼食を持って戻ると本を読みながら俺を横目にした日和先輩が足をばたばたさせて言った。

「せっかく取ってきてやったのに」

「あたしはちゃんと席とつたでしょ」

日和先輩は机をバンバンと叩いた。水の入ったコップがこぼれそうになるくらいに揺れた。

この席は日和先輩のお気に入りの席だった。学校の五階にある食堂で一番眺めがいい場所らしい。前に一度だけ俺が先に食堂に来たときに全然違う場所をとつたらすぐく文句を言われた。確かによく調べてみるとここだけは街のほかに川も見えてちょうどお昼時には太陽もよく見えた。

「そう！太陽つてすごいんだよ。地球なんか全然目じゃないよ。ま、ずね、大きさが地球の百倍以上もあるの」

その話を日和先輩にしてみると先輩はまるで辞書のようにたくさんの情報を教えてくれた。俺は安田と話をさせたらきつとすごいこと

になるだろうな、と思って聞いていたがやっぱり難しかった。  
それでも日和先輩が楽しそうに話すから、それは何か別の楽しい話を聞いているような感じだった。

10

最近、ちょっと疑問に思うのは、わたし自身のことだった。

葵から聞く日和先輩の話を聞いていると日和先輩はすごく可愛くて優しいというイメージが定着してしまった。すると、一つの疑問が浮かんできたのだ。

『もし、もしだけど日和先輩も葵のことが好きだったら、わたしのことを一体どう思うだろうか』

ただの幼馴染は兄妹みたいなものだから、と考えるか。それとも違う学校にいつてくるくせに一週間に一度会ってるのはおかしい、と考えるか。

きっと日和先輩は前者だろう。もし仮に葵と付き合ったとしても二人は仲がいいんだね、って笑いそうだ。だけど、その心のどこかは確実に傷つくような気がして少し怖い。正直、自分たちはこうして週に一度会ったって何にも思わなくても、第三者から見るとそれは少し違うように感じるのかもしれない。

あのとくに、そうだったように。

それは葵が麻衣子と付き合い合っていたときのことだった。葵が突然わたしの家にやってきたのだ。お母さんにお使いを任されたらしい葵は大きな箱一杯に野菜を持ってきてくれた。

「これ、うちのじいちゃんがお前ん家にあげろって送ってきたんだ」「あ、わたしこの葵のおじいちゃんのトマトすごい好きなんだよ」

そのとき、まだ何も知らなかったわたしはついそこで話し込んでしまった。後から聞いた話によると、ちょうどわたしたちが話し込んでいるときに葵の家に麻衣子が遊びに来て、葵のお母さんからあたしの家に行ったことを聞いてしまったらしい。もちろん、葵のお母さんに悪気はない。わたしの家に来ることは別に何でもないスーパ―に買い物に行くのと同じようなことだからだ。しかしきつとそのときの麻衣子には、なかなか帰ってこない葵に裏切られてしまった気がしたのだろう。結局、葵が帰ってくる前に麻衣子は帰ってしまったらしい。

わたしはそれを聞かされてからひどい罪悪感を感じた。友だちと幼馴染。同時に二人を傷つけてしまったのだ。結局、それがあつた以来あまり二人の中はうまくいったと思えないまま自然消滅してしまった。その後わたしは麻衣子と葵の両方に謝った。二人とも笑って許してくれはしたけど、きつと傷を隠しているんだろうな、と思っただけの痛みは取れなかった。

それがあつてから今まで卑怯だと思いつつも恋愛のことがでてもそのことにはあまり触れないできた。だけど、今回ここまで本気で恋をしている葵の姿を見ていたら今のわたしは正しいのだろうか、と疑問に思えてきた。

幼馴染だから、で済む問題ではないような気がする。やっぱりどこでわたしの存在は二人に傷をつけてしまう。

こういうとき、幼馴染は辛い。だけどこのまま触れないでいるときと邪魔することしかできないだろう。

だったらいっそ、わたしは…。

「もうさ、会うのはやめにしよう？」

何があつたか、よくわからない。最近の日和先輩のことばかりだった俺のはずなのにそのメールが安田から来たときに一瞬だけ頭が真っ白になった。たった一行のメールにこれほどまでに感情を左右されるとは思わなかった。

「どうした？」

俺は慌てて送り返そうとそう打ち込んだ。しかし、送信しようとした瞬間にふと、速川麻衣子の影がちらついた。

あのときは確か俺が安田の家に行つてて…。

「あれは俺が悪かったから、大丈夫」

謝られたときにそう言った。それに速川だつてちゃんと納得してくれたはず。なのに、きつと安田はずつと心でそのことを考えていたんだ。自分のせいで、と勝手にせめてたんだ。そして、きつと俺が最近日和先輩のことを話すようになったから自分はまた弊害になるもんか、と自らこんなことを言ってきたのだ。

幼馴染の考えを読むことくらい、簡単だった。

1  
2

「もうさ、会うのはやめにしよう？」

正直、それを送ったときにわたしは少し泣いていた。幼馴染で学校が別々になつても会いに来てくれた葵。そんな優しい葵を葵のためとはいえ自ら突き放すのはすごく辛かった。だけど、これで葵は一男子として日和先輩に恋ができる。葵だつてきつとそれを望んでいいはずだ。わたしはいないほうがいい。

幼馴染の考えを読むことくらい、簡単だった。

13

「ねえ、葵君……。最近なんか元気がなさそう」

日和先輩が俺にそう言ったのは、安田からメールがきた数日後のことだった。この数日あまり笑ったという記憶がない。だからもちろん日和先輩が俺の笑った顔を見てもいない。前までは楽しかった天体の話も、安田をちらちらと思い出させて笑えなくなっていた。

それに最近は正直、食欲もあまりない。自分がまさか安田の一言でこんな風になってしまふとは思ってもみなかった。確かに、安田といるときは安心できて、心から笑えて、暖かくなれた。だけど俺はそれが家族みたいなものだと思い込んでいた。本当の気持ちに気づいたときにはもう遅かった。俺は、本当にバカだと思う。

日和先輩に元気がない、と言われた日の放課後。先輩は珍しく俺の教室に顔をだした。

「おい、あの先輩っていつもお前と食堂にいる……。お前、付き合ってるの？」

友だちにそんなことを言われても、なんだか心は乾いていく一方だった。俺は答えないまま日和先輩が待っている廊下にでた。先輩はいつになく真剣な顔つきだった。

「葵君。わたし好きな人ができた」

そう聞いたのはその後二人で学校の屋上に行ったときだった。俺は腕を引っ張られてここまで連れてこられた。本当は立ち入り禁止の人気のない屋上は風の通り道になっていて日和先輩の髪も風と踊るように揺れていた。



「好きな人って誰？」

俺は風に負けないように大きな声で聞く。

「好きな人ね。君だよ、古池葵君」

真っ赤だけど真剣な顔の日和先輩の口からでたその言葉は、屋上に立っている俺の足元を崩すかのように感じられた。

それから、俺は日和先輩の本当の気持ちを会ったときに振り返って細かく聞いた。

風が吹いていなかったらきっと体温はものすごく上昇したと思うくらいに火照った顔で日和先輩は細かく答えてくれた。

全部聞いた後には心は砂漠のように更にならなくなっていった。

そして、全ての覚悟を決めた俺は、言った。

七月六日。暑い夏の始まりに俺は…。

14

あたしが、その子に出会ったのは図書室だった。特進クラスの子が真剣に勉強する中、一人だけ大きい声でこけたり、パソコンを睨んだり。最初はおかしな人だなと思っていたんだけど、ちらちらと見ているうちになんだか面白くなって、遂にはあたしから話しかけてしまった。思えば、そのときからあたしは葵君のことが気になっていた。

距離置かれたくないなって気持ちがあったから、あたしは先輩なのにタメ口で話して、と言った。あたしのことよく知ってもらいたかったからいろんなことを話してあげた。

「この眼鏡、実は頭よく見せるための伊達なんだ」

「あたしね、食堂のここの席が一番好き」

「いい？天体って言うのはね、まだまだ未知の世界。だけど、だか

らこそのすごさってあると思うんだ。だから好き」

そう、葵君にはたくさん、たくさん話をしたんだ。

「好きな人ね。君だよ、古池葵君」

あたしは葵君に嘘をついたことがない。眼鏡のことも、食堂のことも、天体のことも、葵君のことも全部が本当のあたし。正直、これほどそのままのあたしを人に見せたことなんてあまりなかった。

風が舞う屋上で頬を赤くしたあたしはそんなあたしの全てを葵君に話した。正直、葵君がそんな気持ちに答えてくれないだろう、つてわかつてはいながらも、元氣のない葵君を見ているとこのままあたしから離れていっちゃうんじゃないかと無闇に焦って、遂に決意を固めた。

「ひよりん。頑張つてね」

クラスの友だちの後押しもあつて、決断してからのあたしの行動は早かった。すぐに葵君のいる1年C組に行つて葵君を呼び出した。

「どうしたの？」

そう言つた葵君の腕を引つ張つて屋上まで連れて行つた。立ち入り禁止のロープは、目に入らなかった。

これからどうなろうと、言わなくちゃいけないと屋上へ続くドアを勢いよく開けた。

空。風。街。太陽と腕から伝わる葵君の体温。

それが一瞬であたし全部を支配して、だからそれ以降は勝手に口が動いていたかもしれない。

「好きな人ね。君だよ、古池葵君」

覚えてはいるけれど、覚えていない。兎に角混乱に似た何かがあたしを動かしていた。だけど、それがあたしの全てだったから、構わなかった。

やがてあたしが葵君に全てを話し終えると、遂に葵君は口を開いた。

人生で一番緊張したのは紛れもなく、この瞬間だった。

七月六日。暑い夏の始まりにあたしは…。

15

衝撃が走ったのはそのときの葵と一緒に感情だっただろう。

「今日、日和先輩に告白された」

そうメールが来たとき、わたしはもう動けなくなっていた。

これが葵が望んだこと。わたしはただ影で喜ばいいんだ。わたしはただの幼馴染なんだから。そう考えられたのはそれから半日後の夜中だった。

メールのきた夕方頃からそれまで、殆んどわたしは何もすることができなかった。ただ、涙が流れるとやっとこれでいいんだ、と考えることができた。

「よかったじゃん」

携帯電話にそう打ち込むも、クリアを押してしまう。そんなことをしていると、自分の気持ちに気づくのにそう時間はかからなかった。

中学のとき。葵が麻衣子と付き合うことになった日。封印したあの気持ちを、わたしはまた取り戻した。

するともうわたしの身体は勝手に動いて、気がつけば家を飛び出していた。

なんで、こうなるまで忘れたままでいたんだろう。わたしの正直な気持ちは、葵によかったね、と言えないんだ。もう、手遅れかもしれないけれど、遠い遠い記憶のわたしたちのようにお互いに好きと言える二人になりたいんだ。わたしは本当にバカだ。

息が切れるまで懸命に走ると不意に目から涙が零れ落ちた。わたし

しは立ち止まってそれを拭った。肩で大きく息をしても心臓は色々なことでもう限界だと思うほどに鼓動が早くなっていた。仕方なくわたしはふらふらと歩きだす。

とにかく葵に会いたいという気持ちだけで一歩ずつ前に進んだ。

こつちへ向かってくる一人の人影が見えたのはそれから数分後のことだった。息は已然として落ち着く様子を見せない。わたしは噎せながらも大きな声で言う。

「葵……！」

そう、そこにいるのは間違いなく葵だった。葵もまた走ってきたらしく肩で大きく息をしている。

「でかい声……だすなよ。近所迷惑だぞ？」

一生懸命息を吸って葵は言っただけ、わたしはそれに続く言葉がうまく見付けられなかった。

お互いになぜここにいるんだろう、と考えながらも時間は静かに流れていく。

やがて息も整うと、葵は電柱にもたれかかった。

「あのさ、メールの返事返ってこなくて……心配になってさ……」

「心配って……？」

葵の目を直視できないわたしは電柱の逆側にもたれかかって、聞き返した。

「勘違いしてるかなって……。俺さ、日和先輩の告白、断ったんだ」

「……………え？」

「俺には好きな人ができたんで、ごめんなさいって」

電柱を挟んでわたしの後ろにいる葵の表情がすぐ気になった。だけれどもし悲しい顔をしてたら、と思うとなかなか身体は動いてくれなかった。

「好きな人って？」

わたしは逃したら次はないと考えて、兎に角聞いた。もしかしたらそのときわたしは葵を信じてたから聞けたのかもしれない。

「葉摘。… 幼馴染の安田葉摘」

その名前がでたときには身体は動かないどころか、今度は勝手に動いて葵の前に立っていた。身長の高い葵を見上げて言う。

「ありがとう。わたしも好きだよ」

しばらく笑いあった後、わたしたちは久しぶりに手を繋いで歩いた。また何でもない会話をして、心地よい葵の暖かさを感じて。

「そうだ。明日さ、一緒にここに行こう」

葵はわたしを家に送り届けたときに玄関でポケットから一枚のチラシを取り出した。

「プラネタリウム。七夕特別天の川観測…。うん、いいね。行こっか」

わたしは指切りをしてから、葵を見送った。

一人の玄関でチラシを手に笑顔は消えることがなかった。

七月六日。暑い夏の始まりにわたしは…。

16

「あーおーいー。遅れちゃうよー」

七夕の七月七日。俺は今日もまた、その声で目が覚めた。昔と違うのは勝手に部屋に入ってきて、俺の身体をゆさゆさと揺らす葉摘。

「うー…」

寝ぼけ眼に葉摘の笑顔。

なんでもない一日が幕を開ける。

飲み込もうにも溜め息はもうでなかった。

T  
H  
E  
  
H  
A  
P  
P  
Y  
  
E  
N  
D  
\*

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3934b/>

---

プラネタリウム ～懐かしい匂い、風の心～

2010年12月11日00時47分発行